

## 【第3回大会報告】



## 第3回大会報告

## ◆第3回大会開催報告

井野秀一

幹事（北海道大学）

本年の日本バーチャルリアリティ学会大会は、天候に恵まれるなか、8月19日（水）～21日（金）の3日間の日程で北海道大学学術交流会館にて開催されました。開催地が東京や大阪から遠く離れた札幌であるにもかかわらず、大会の参加人数は300名を越え、大変賑やかな大会となりました（懇親会は実行委員らの予想をはるかに凌ぐ185名）。大会期間中は、バーチャルリアリティに関する熱心なディスカッションが、各自の専門分野や立場の違いを越えて、あちらこちらで繰り広げられていました。また、各種VRツールやVR研究に欠かせない計測器などを一堂に集めた企業出展ブースや実演展示コーナーも盛況でした。これら第3回大会の印象をできるだけ新鮮なうちにNewsletterに書き留め、第4回大会へのバトンにしたいと考え、以下のような本大会報告集を企画・編集いたしました。今後の大会運営への一助になれば幸いです。最後に本大会を支えて下さった多くの方々に厚く感謝いたします。

## ◆会長の踊り

伊福部 達

大会長（北海道大学）

学会中日を終えて懇親会場に入った途端、溢れ出るような熱気と貪り食う集団に出くわして、一瞬とまどったものの大会に皆が満足しているようだという安堵の気持ちが沸いてきた。今年の4月から本格的な作業が始まり、まず、ポスター作りと特別講演者の決定、次に、送られてきた原稿のチェックと論文集の印刷、技術展示のための設営と会場作り、と普通の学会の準備と同じようである

が、それまでに至るには私共の研究室の職員を中心とする実行委員の涙ぐましいほどの努力があった。118件の発表、22社による技術展示、11件の実演作品発表、シンポジウム、特別講演と盛りだくさんの企画があり、参加者は300人を越えていた。特別講演のゴジラ特撮の裏話では、あらかじめ用意しておいた台本から話がどんどん変わっていき、司会の私アドリブになってしまったが、後でそれがかえって良かったと聞きホッとした。この大会を通じてVR学会も順調に発展してきていることを肌で感じる事ができた。懇親会で館会長が「アイヌの踊り」に参加した姿がそれを物語っていた。

## ◆VRSJAC'98 実行委員からの報告

## (1) シンポジウム報告

田中 敏明

広報担当（札幌医科大学）

シンポジウム「VRに望むこと - 福祉と教育の立場から -」についてご報告いたします。

はじめに司会の井野先生（北海道大学電子科学研究所）より、本大会では、社会は「VR」に対して、どんな期待を寄せているのかを考えるシンポジウムとして、特に、「福祉と教育」にスポットを当て構成した旨の説明がありました。

まず、福祉とリハビリの分野から、「VRへ望むこと - リハビリテーションへの応用 -」と題して、筆者、田中（札幌医科大学保健医療学部）が講演し、リハビリテーションのなかでも、増加の著しい高齢者や高次脳機能障害者のためのリハビリやそのバランストレーニングに対する「VR技術」の応用を、小著の研究例を交えつつ、具体的ななかたちで提言しました。

次に、聴覚障害児教育の分野から、「VRに望むこと-聾児の言語指導と吃音矯正-」と言う内容で、庄司先生（北海道大学電子科学研究所）から御講演を頂き、聴覚障害児や学習障害児の教育における感覚統合を積極的に利用した学習の大切さと、その学習に必要な適切な感覚情報や情動情報のフィードバックにVRが有効であろうとの指摘をいただきました。

視覚障害教育の分野からは、「VRに望むこと-視覚障害教育の立場から-」と題して、田中良広先生（北海道高等盲学校）は、視覚障害の考え方や盲学校で行われている歩行訓練や感覚訓練について説明していただき、VRの導入を期待する現場の具体的なニーズとして、歩行訓練環境、バーチャル美術館やバーチャル運動空間を挙げていただきました。

最後に、スポーツ教育の分野から、「体育教育からVR技術への期待」と言う内容で、川初先生（北海道大学体育指導センター）から、ヒトの各種運動機能トレーニングは如何にあるべきかを、スキージャンプの実例に基づき解説していただき、また、VRシステムは、スポーツ能力向上に貢献できる可能性を充分に秘めているとのご指摘もいただきました。

以上、福祉や教育の現場の4氏からの提言から、今後益々、VRに対する「大きな期待」があることを確認でき、またVRの将来への展開が楽しみになるシンポジウムでした。

## (2) 懇親会と研究室ツアー

### 堅田秀生

会場担当（MRシステム研究所）

#### 「懇親会」

学会二日目、20日（木）の18：30からサッポロビール園ビール博物館スターホールにて懇親会が開かれた。参加者は185名と過去最大であり、バス4台にて学会場から移動した。料理もバイキング形式で、タラバ・ズワイカニ、刺身盛合わせなどの魚介類を中心に14種類、ビールは工場のできたて生ビールであり、心ゆくまで飲んで食べていただいた。参加者のお腹がある程度充たされてから、挨拶・乾杯の音頭がおこなわれた。それに続いて小川基さんと嵯峨治彦さんによりアイヌ・モンゴル伝統音楽の演奏が披露され、会長と大会長まで巻き込んだリムセ（アイヌの踊り）のお祭りで終了した。その盛り上がるのまま、来年の大会の紹介で閉会となった。

#### 「研究室ツアー」

学会日程終了後の21日（金）13時から15時まで、5カ所の研究室・研究所の公開をおこなった。当日は幸いにも晴天で、短い時間にも関わらず、いずれの研究室・研究所とも多くの見学者で賑わっていた。公開場所ならびに主な内容は以下の通り。

- ・工学部 複雑系工学講座 自律系分野：アルゴリズムの開発と計算機シミュレーションを基にした自律・分散情報処理のアメリカロボットや筋電インタフェースの研究について、デモを用いて紹介がなされた。
- ・工学部 制御情報工学講座 生産情報工学分野：曲面モデルを実際に触ることのできる力覚呈示装置を用いて、VRのCAD/CAMへの応用について説明がなされた。
- ・医学部 中央研究部 神経機能検査室：コンタクトレンズ型のサーチコイル法を用いた定量的な三次元眼球運動計測システムとその結果が紹介された。
- ・エム・アール・システム研究所（札幌分室）：180度の視野をカバーする3面アーチスクリーンと6軸のモーションベースからなる複合現実感刺激呈示システムによるVR刺激体験、そして、視機能検査・自律神経検査・平衡機能検査の機器説明などが行われた。
- ・電子科学研究所 電子情報処理部門 感覚情報研究分野：感覚系に障害のある人や高齢者用の支援工学機器のデモ・体験がおこなわれた。

最後に、この場を借りて、研究室ツアーに協力して下さった研究室・研究所に感謝の意を記しておく。

## (3) 展示報告

### 上見憲弘

作品展示担当（北海道大学）

#### 「企業出展」

本大会では22社の企業に参加していただき、VR環境の呈示装置やその呈示による影響を調べるための計測装置など、VRに関わるさまざまな最新の装置を紹介していただきました。HMDなどの視覚情報呈示デバイスの出展